



第七回 鎌倉文学館こども文学賞作品集

## 応募総数

小学生の部 191作品

中学生の部 339作品

## 審査委員

三木卓（作家・詩人）

角野栄子（童話作家）

富岡幸一郎（文芸評論家・鎌倉文学館館長）

## 奔放な心たちと遊ぶ

三木卓

選考で、こどもの奔放な文字を見ることは楽しい。パソコンで打ってあっても評価の結果が悪くなることはない、と思うけれど、太い鉛筆でしっかり書いた文字は、じーんと、その子の気持ちがつたわって来るような気がする。

今年も沢山の詩を読んで楽しかった。小学生の大賞は西鎌倉小学校の遠藤瑞佳さんの「音」。雨が降りはじめた野で生きている動物たち。動静が、のびやかな筆致で語られるが、そこには丁寧なまなざしと生きている者へのやさしさが感じられ、それが最終連にいたって確固たるものになる。とても快い詩。

清泉小学校の蝦名愛々璃さん「かりたもの」は、わたしたちの世界は、みな一人で自足しているのではなく、「それぞれ万物みんなからかり」という行為で進行しているという目で見ている。「かりる」というイメージで世界をすべてみようとするレトリックはいい。日本大学藤沢小学校の内藤健介くん「かぶと虫」は、詩としては地味なものだが、生命に対する作者の手柄、態度がしつかりにじみでている。

中学生の部では、明治大学付属明治中学校の饗庭健太さん「鏡の葛藤」が大賞になった。自分が鏡として、自分がかうけとめる女性に対してなんとか力をあたえてやりたい、という気持。男らしいやさしさにあふれた佳品である。

聖園女学院中学校の神野ひなたさん「片づけ」は大いに笑えた。お姉さんや妹のいない男の子は、女の子がいつもしっかり片づけをしているかと思いがちだが、いつもそういうわけじゃないんだなあ。やがて結婚すると、しばしばわかることだけだ。

ますます多くの学校から元気な投稿が来ているように思う。来年はいつそうにぎやかになってほしい。

こども文学賞

大賞

小学生の部 大賞 「音」

鎌倉市立西鎌倉小学校5年 遠藤 瑞佳さん  
えんどう みずか

雨がふってきた

ポツポツ

少ししか雨音がしない

最初の第一段階

ザーザー

ちよっと強くなった雨音

第二段階

小鳥が池に向かって飛んでいった

パタパタ

かわいらしい羽音がする

小鳥が池に着いた

もうぬれているのに水浴びを始めた

幸せそうだ

雨の水と池の水はきつと

ぬくもりがちがうのだろう

池のとなりに馬の群れがいた

中には草をはんでいる者もいる

池の水をのんでいる者もいる

とくになにもせずただ

ぼうっと立っている者もいる

この草原のとなりの森でも

やはり雨がふっていた

森の中にしかが二頭立っていた

その目は遠くを見ていた

その近くのうさぎの巢にうさぎの親子がいた

うさぎの巢に雨はふりこまなかった

けれど親うさぎは

子うさぎの上におおいかぶさった

雨の音を遠くで聞きながら

森の中の小屋におじいさんがいた

ひとりぼっちで

パンを食べていた

小屋の中ではその音がとても大きく聞こえた

中学生の部 大賞 「鏡の葛藤」

明治大学付属明治中学校2年 饗庭 あいは 健太 けんたさん

彼女は毎朝私を見つめる。

そして毎朝深い溜め息をつく。

私に映された自分の顔を見ながら。

いや、正確には、彼女自身の顔ではない。

あれは私が細工した偽物の顔だ。

彼女は昔、大怪我を負った。

見ているこっちが痛くなる程の怪我を。

その顔を映すのが辛くて、かわいそうで、

私はいつもその部分をぼかして映す。

やっつてはいけないことだとは分かっている。

そのままの姿を映すのが鏡なのだから。

でも本当の姿を映すことはできない。

私は鏡である以前に、

彼女を想う存在であるから。

小学生の部 入賞

## 入賞 「かりたもの」

清泉小学校1年 蝦名<sup>えびな</sup> 愛々璃<sup>あめり</sup>さん

うみでおよぐときは、うみをかりる。  
やまをのぼるときは、やまをかりる。  
あかいとまとがたべたいときは、  
おひさまをかりて、つちをかりる。  
たんぼぼをいっぱいつかっつて、  
おはなのかんむりをつくるときは、  
たんぼぼのたねをかぜをかりてとぼす。  
たいようがうみからおきたら  
そらでみんなをみるしごとをして、  
ゆうがたくものなかできがえて  
やまにかえる。  
つきがくものなかからでてきたら  
くらくなつたみちをあかるくするしごとをして、あなやまにかえる。  
みんなが、かしてくれるから  
みんながしごとをして、ちかすからわたしがいる。ありがとう。

入賞 「おおだまころがし」

杉並区立八成小学校1年 久保田 雄大さん

おおだまころがし

ころころころ

ぼくの まえに おおだま きたら

めのまえ まっかに なった

あいてチームは まっしろかな

# 入賞 「川」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校2年 石多<sup>いした</sup> 奏彩来<sup>そあらい</sup>さん

およがせてくれた川

つめたかった川

キャンプ場の川

あしたもドキドキの川

友だちができた川

きんぎらの魚がいた川

貝がらなかった川

とびこんだ川

すべり台みたいになった川

足がつかなかった川

きれいな石も でこぼこの石も

大きな石もあった川

わたしをまっついていてくれてありがとう

もっと魚がふえるといいね

来年も さ来年も それからずっとも まっついてね

## 入賞 「かぶと虫」

日本大学藤沢小学校2年 内藤 ないとう 健介 けんすけ さん

ついにしんでしまった

だれもいなくなつた

ぼくはその虫かごを見る

それからもずっと見る

いつもわらっていたぼくの顔がだんだんとくらくなる

きよ年の夏からぼくはたまごだつたきみたちを見ていた

まだ小さかつたきみたちだつたけど

ぼくはずっと見ていた

体が大きくなるきみたちを見ていた

土をとりかえるたびにきみたちはよろこんでいた

そして夏になりきみたちは土から出てきた

ぼくにりっぱなすがたを見せてくれた

その時のことをいつまでもわすれない

元気だつたきみたちがよわっていくのはかなしかった

ぼくはおうえんするしかなかった

でもかなわなかつた

うごかなくなつたきみたちを外の土にうめた

なくのをがまんしたらのどのおくがぐつといたくなつた

たのしい思い出をありがとう

ぼくは今きみたちがのこしてくれたたまごをそだてている

## 入賞 「線香花火」

清泉小学校2年 野田<sup>のだ</sup>花音<sup>かのん</sup>さん

「はかない……」

とお母さんが言いました。

線香花火を見て言いました。

あわててふき出すせつかちな花火、

バチバチはじけるげん気な花火、

赤、ピンク、ブルーとキラキラかがやく

おひめさま花火。

さい後は、やっぱりいつも線香花火。

小さなきれいなきれいな花をさかせ

しずかにぽとんとおちて

ちっていきます。

「はかない？」

「むかしむかしの言ばみたい……。」

わたしは、はじめてしった言ばを

そうおもいました。

そして、ちよっぴりさびしくなるのです。

たのしかった夏休み

日記ようしが後二まい

「もうすぐおわりだよ。」

と教えてくれます。

線香花火みたい……。

## 入賞 「おぼん」

鎌倉市立玉縄小学校3年 鎌倉かまくら 琉成さんりゅうせい

おぼんは海に来る。

川にも来るって知ってるよ。

だけど

おぼんはプールにも来るって

コーチが言ってた。

川は海とつながっているけれど

プールはどこともつながっていない。

だいたい

琉成は広島のおじいちゃん家に行くのに

おぼんがプールに来てたら おぼあちゃん

まいごになっちゃうんじゃない？

琉成、ケイタイ電話持ってないから

会えなかったらどうしよう。

あつ。もしかしたらおぼあちゃん

プールのすきまから出て

広島まで来るんじゃない？

ものすごく遠回りだけど…

おぼあちゃん

そんなんでおぼんに間に合うかな？

## 入賞 「犬がすき」

犬のアイとおぼあちゃんとぼく  
きょうもラジオ体そうにやって来た  
きょうもみんな来ている

ゴールデンレトリバー三頭

ポメラニアン二頭

ミニチュアダックスフント一頭

トイプードル二頭

ミニチュアピンシャー二頭

ウエルシュコーギー一頭

人からなでられることがすきな犬もいれば  
人からなでられることをいやがる犬もいる

ボールで遊ぶのがすきな犬もいれば

ボールで遊ぶのがきらいな犬もいる

おやつのおうわくにまける犬もいれば

おやつのおうわくにまけない犬もいる

家ぞくの中で母さんがすきな犬もいれば

父さんがすきな犬もいる

外で手をなめる犬もいれば

外で手をなめない犬もいる

だれかがきたらすぐにほえる犬もいれば  
全ぜんほえない犬もいる

メロンがすきな犬もいれば  
メロンなんてたべない犬もいる

人からにげようとする犬もいれば  
人によっていく犬もいる

きらいだった人を急にすきになる犬もいる

「なわつてもいい？」

じゅんばんになぞる

おやつをあげる

ふわふわさらさらみんなかわいい

入賞 「雨あがり」

目黒区立碑小学校6年 五十嵐<sup>い</sup>がらし<sup>ら</sup> 藍<sup>あ</sup>さん<sup>い</sup>

雨があがり

葉からしずくがたれた

ひとつは笑うように

ひとつは悲しむように

ひとつは怒るように

ぼたぼたぼたと

落ちていき

道路に絵をかいた

小さな小さなお池の絵

そこを飛んでこえている

小さな小さなかえる

かえるをまたいでいる私の足

私の上を飛んでいる雨あがりの晴れた空

入賞 「はじまりの点」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校 6年

杉山 すぎやま

琉晟さん りゅうせい

点

広がれ

家の近所に

次に大きな県に

それから広大な国に

次第に地球という世界に

世界は文明を広げ争いになり

命のもろさと人の軽さに気付いて

初めて命の尊さと人の大切さを知った

自分の外を知って自分自身の内を知らない

何を知り何を知ろうとしなかったのか

何も分らず時間は進み続けている

思考のない光が集う暗闇の中

ただそこにあるのは原子

人々は点に戻り始め

まるで風に任せ

飛んでいる

砂の粒

点

## 入賞 「おとうと」

茅ヶ崎市立小和田小学校6年 藤田 惟一ふじた ゆいいちろうさん

おとうとはいつもうるさな。

「うるさな。」

としかるとすへおこる。

おとうとはいつもきまへれ。

けったり、甘えたり、なぐってきたり。

おとうとはいつもじやまをする。

勉強や、この詩を書くのもじやまをした。

おとうとは泣き虫。

一度泣くともう手がつけられない。

さげびながら、キックや、パンチをやだと言うほどやってくる。

ぼくはおとうとがきらい。

キックや、パンチ、泣いたり、じやましてきたり、甘えたり。

でも、甘えてくるとうれしい時もある。

それと、一緒に遊ぶと楽しい時もある。

だから、おとうとがいなくなるのは悲しい。

やっぱり、もう少しやさしくしてあげようかな。

と、思った矢先にキックされた。

中学生の部 入賞

入賞 「おふとん」

星美学園中学校1年 清宮 羽奈さん

きよみや

はな

ねぼうしたのは

おふとんのせい

おふとんが

なかなかわたしを

はなしてくれなかったから

おひるねしたのは

おふとんのせい

おふとんがいつしよにねようって

ことわっても

ゆるしてくれなかったから

きもちよくねれたのは

おふとんのおかげ

わたしはあしたもねぼうする

わたしはあしたもひるねする

## 入賞 「片づけ」

聖園女学院中学校1年 神野こうの ひなたさん

朝起きてとなりを見ると

目覚まし時計がうるさいと怒る妹と

なんでこんなに片づけができないんだと怒る机が見える。

妹には

「そんなにうるさくないでしょ」

と言ってすます。

だが、机にはそんなの通用しない。

しょうがないから片付けするか

途中で読書しながらなんとか終える。

片付けをした後は母と妹に怖いと言われるくらい機嫌が良くなる。

なんだろう。

片づけをしたら三日は持つ。

だが五日以上持ったことはなかった。

四日目の朝、

また妹と机に怒られる。

やっぱり片付けはめんどくさい。

しかし、やった後はとても気分が良い。

なんだろう。

妹とけんかしながら片付けても  
読書しながら片付けても  
怒られながら片付けをしても

やり終わったら気持ち良くなる。

なんでだろう。

難しそうなので私の中では

「意外と片付けが得意だから」  
ということにしておいた。

そして四日目の朝、

意外と片付けが得意な私は  
妹と机に怒られる。

# 入賞 「白いクレヨン」

星美学園中学校1年 杉浦 すぎうら りつ子さん りつこ

白い画用紙があったら  
君たちは何を描く？

赤いクレヨン飛び出して  
リンゴ！ と言った

ピンクのクレヨンほほえんで  
サクラ！ と言った

黄色いクレヨン走り出し  
キリン！ と言った

青いクレヨン元気よく  
海！ と言った

緑のクレヨンさわやかに  
森！ と言った

黒いクレヨン静かな声で  
夜の空 と言った

さてさて君は何を描く？

白いクレヨン得意げに

透明人間!! と言った

入賞 「ガラスが割れた」

ガラスが割れた  
パリンと割れた

ガラスの破片は  
するどく  
とがっていた

もとのガラスは  
丸っこかった  
でも

ふとした事で  
するどくなつた

彼は心に  
傷を負つた

彼の心は  
人を拒んだ

前まで彼は  
優しかった  
でも  
一言だけで  
人を拒んだ

慶應義塾普通部1年

鈴木

湧才さん

人も物も

一瞬で

壊れる

ガラスは布で

心は温もりで

しつかりくるんで

守ってあげよう

ガラスは割れた

パリンと割れた

心は守った

ほっこり包んだ

入賞 「夏空を閉じ込める」

緑ヶ丘女子中学校1年 高橋<sup>たかはし</sup> 莉珠<sup>りず</sup>さん

ぷしゅうと開けたラムネから

爽やかな風が鼻につく

ビー玉からんと転がして のぞきこんだら

夏空 びんに閉じ込めた

金魚の入った袋の中

ぷくぷく泡がはじけだす

顔近づけて つついてみると

夏空 袋に閉じ込めた

ちりんと鳴った風鈴が

夏風外から運んできた

透明な風鈴 なでてみる

夏空 風鈴に閉じ込めた

さらさら溶けた氷菓子

ソーダの匂いがくすぐったい

ぺろりと一口 なめてみる

夏空 口に閉じ込めた

はらりと落ちた線香花火

なつかしい気持ちに包まれる

小さな炎の その中に

夏空 ちらちら閉じ込めた

ヒグラシ鳴いてる夕暮れに  
すうっと深く息を吸う

草花の匂いと 少しだけ

夏空 鼻に閉じ込めた

夏の終わりの夜空に花火

君のその目に美しく咲いた

胸打つ僕の 心には

夏空 じんわり広がった

## 入賞 「風の恋」

明治大学付属明治中学校2年 石井 くるみさん

僕は恋をした

太陽に負けず頑張る

あなたに

僕は恋をした

きれいなピンク色をした

あなたに

僕は恋をした

僕と優雅におどってくれる

あなたに

いつもは弱い僕だけど

たまには男らしく

あなたを迎えに行くよ

ありったけの力で

君を隠す窓を

こじ開けるんだ！

僕は恋をした

本当に大好きです

カーテンさん

## 入賞 「夜のうた」

立命館慶祥中学校2年 小林 こはやし  
天音さん あまね

昔、私が小さくて

夜は母の布団の中に

もぐり込んで寝ていた頃

あったかくなって

うれしくなって

思わず歌を口ずさむと

母は私に言いました

「夜中に歌うと、オバケが来るよ。」

「歌う子供を見つけては、オバケの国に連れて行くよ。」

私は急に怖くなって

今のは違うと泣きました

「くちぶえもだめ?」

「くちぶえもだめよ。」

「はなうたもだめ?」

「はなうたもだめよ。」

「おへそは取られる?」

「カミナリ様じゃないから、おへそは大丈夫よ。」

私は少し安心して  
夜中に連れて行かれぬ様に  
母の手をぎゅっと  
にぎって眠りました

中学生になったけれど  
夜更けに歌ってしまった時は  
今夜もさびしいオバケ達が  
歌う子供をさがすから  
今のは違うとあやまって  
明かりを消して眠ります

入賞 「ブランコは手を振る」

明治大学付属明治中学校2年 鈴木 咲音さん

時おり鳴る合図とともに、

子供たちはやってくる。

ブランコはゆれる。

子供たちは楽しそうに遊ぶ。

何気なく手をつないで。

ブランコはゆれる。

ふたたび合図が鳴り、

子供たちは帰る。

ブランコはゆれる。

しずまった校庭のすみで、

悲しげに手を振る。

ブランコはゆれる。

子供たちはにぎやかな教室で

思い出をつくる。

ブランコはとまる。

# 入賞「僕の心のブラックホール」

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校3年 澁谷 耕大さん

何を言われたのかすら 覚えていない

罵詈雑言

ただ話していただけたのに 言いがかりをつけられた

この僕

ブラックホールへと吸い込まれた

素粒子レベルに分解された僕の思い

言葉を放った側は忘れ去っているのか

放たれた側はいつまでも引つかかって離れないのに

この思いはどこに投げかければいいのだろうか

僕の心は問い続けている

こうしている間も増えている質量

重くなり続けている ブラックホール

# 入賞 「マルタ島の景色」

星美学園中学校3年 高塚 たかつか  
晏奈 あんなさん

ラムネびんを太陽ですかす

水色ではない

ラムネ色が輝きでもっと透明になった

そんな空

豆腐におろしたにんにくがのっている

純白ではない

長い時間の人々の呼吸と汗がしみついた

そんな壁

全てのうま味を吸いこんだ鍋底の大根

茶色ではない

じっくり静かに煮込み少しこげかかった

そんな土

単純ではない

全てのものに長い時間を感じる

発行日 平成30年11月4日

編集・発行 鎌倉文学館指定管理者

鎌倉市芸術文化振興財団・

国際ビルサービス共同事業体

鎌倉文学館

鎌倉市長谷 1・5・3